

〈書評〉

Georges Benrekassa :
*Le Langage des Lumières.
Concepts et savoir de la langue.*

Presses Universitaires de France, 1995

増 田 真

本書の著者は今さら紹介するまでもなく、長くパリ第7大学の教授を務めた18世紀学者で、モンテスキューを中心とするこの時代の思想の専門家として知られている。すでに *Le Concentrique et l'excentrique : Marges des Lumières* (Payot, 1980), *La Politique et sa mémoire : le politique et l'historique dans la pensée des Lumières* (Payot, 1983), *Fables de la personne : pour une histoire de la subjectivité* (PUF, 1985) などの著作があり、本書は1987年に刊行されたモンテスキュー論 (*Montesquieu, la liberté et l'Histoire*, Librairie générale française) に続く著書である。

題名(『啓蒙の言語』)にあるように、本書の論考の対象は18世紀における言語の問題に関連しているが、この時代の言語論に関するものでもなく、またこの時代におけるフランス語に関する言語学的な考察でもない。本書で扱われているのはむしろ18世紀の思想におけるいくつかの概念やテキストであり、ある概念の意味や用法の変遷、その概念の思想史上の役割、あるいは、ある作品における記述の特徴などに焦点が当てられている。その意味では、本書の対象は言語や言語論というよりは、むしろ言説のあり方や言説における概念の機能であるといえる。本書を構成する九つの章のうち、多くのものはすでに専門誌の論文などの形で発表されたものであり、二つの部分に大別されている。前半の四つの章には「名称」という総題がつけられ、それぞれ一つの概念あるいは用語(「危機 *crise*」, 「風俗 *mœurs*」, 「市民 *citoyen*」, 「穏健 *modération*」)を扱っている。

第一章(「医学用語、演劇用語、政治的隠喩：18世紀フランスにおける危機の観念」)は、「危機 *crise*」という語が現在のような政治的意味をもつようになった経緯をたどっている。この語が元来医学用語であり、病状の変化を告げる転換期(いわゆる病気の「峠」や「山」)を意味していたことはよく知られている。著者は当時の辞典など多くの用例を引用しつつ、この語の意味の変遷を明らかにしようとしている。その調査によれば、18世紀のフランスの辞典は多くの場合この語の医学的な意味しか収録しておらず、それは『百科全書』でさえ例外ではない。そのように、「危機」という語が政治的で使われるようになったのは比較的遅い時期になってからのことであるが、著者によれば、この語に新たな意味を付与するのにルソーの作品が二つの面で大きく貢献したらしい。それはまず個人史における困難な時期について用いられ、『新エロイズ』や

自伝作品に見られる用法である。特に『新エロイーズ』第五部においてサン＝ブルーが恋愛感情の再燃を「危機」と形容している部分や、『告白』第九巻においてドゥドト夫人との恋の顛末が語られている箇所が例として挙げられている。さらに、この概念を政治的用語として定着させるのに決定的な役割を果たしたのは『社会契約論』であり、その第二巻において、国家や国民が困難に直面した状況についてこの語が用いられ、従来の医学的用法と新たな政治的用法との連続性が明白であることが示されている。

第二章は「政治的概念」としての風俗、1680年から1820年まで」と題され、この概念の変遷だけでなく、それに関連した政治的思想的問題の変化をも浮き彫りにしている。著者によれば、17世紀において「素行、品行」を指していた風俗の概念が18世紀になって地理的歴史的に多様で相対的なものとして社会学的な関心の対象となっていき、新たな問題設定が、法と風俗の相互関連という形でモンテスキューによって提起され、それがルソーによって引き継がれた。しかし、革命期になると「風俗」が再び「品行、素行」という道徳的な意味が支配的になり、モンテスキューによって提起された問題は見失われてしまった。そして結局18世紀には関連した問題としてとらえられていた社会的現実としての風俗と、規範としての道徳が分離してしまうことになる。

第三章は『『百科全書』における市民の用語と概念』と題され、近代的な市民概念の形成過程の一側面が考察され、さまざまな例（モンテスキュー、ルソー、ディドロ、ドルバックなど）にもとづいて、この概念が主権の観念や政体についての立場と深く関連していることが論証されている。

第四章（「穏健派、穏健、穏和主義：古典主義時代からブルジョア時代までの穏健の観念」）はモンテスキューの『法の精神』において重要な「穏健 *modération*」という概念についてであるが、それが「節度」という従来の道徳的な意味から政治的な用語へと変化していった過程やモンテスキューにおけるこの概念の特徴（道徳的特質であると同時に政治制度の特徴でもある）が論じられ、さらにはそれが革命期にはジャコバン派から非難される「穏和主義 *modérantisme*」という蔑称へと転じる経緯が考察されている。

それに対して、後半の五つの章は『百科全書』や『法の精神』のいくつかの断片や問題を扱っている。第五章は『『百科全書』の項目「享楽」：語、言語、テキスト、イデオロギー』と題され、ディドロの筆によるこの項目の諸相を検討している。この項目は、内容が性的快楽から所有物の占有にまで及ぶ複雑なテキストであるが、ほかのさまざまなテキストとの照合により、ディドロにおける女性についての言説が浮き彫りにされる。

第六章は「描写すること、書くこと、教えること：『百科全書』における一連の項目「ピン」および「ピン職人」と題され、この一連の項目の成立過程をはじめ、その後『系統的百科全書』やアダム・スミスの『国富論』に再録または再利用されるまでの変遷を論じている。この中では、『百科全書』の記述が純粹に技術的な問題だけではなく、すでに作業の効率という問題に及んでいるのに、『国富論』第一編第一章（「分業について」）に見られるような生産性に関する経済学的な論理にいたらないことが強調されている。

第七章は「百科全書的なものを考える：『百科全書』の項目「百科全書」と題され、この項

目におけるディドロの論述に焦点を当て、ディドロの言語論にも触れつつ、いわばディドロの学問論にアプローチしている。それによれば、ディドロは言語を普遍的な知の手段として固定化することは不可能であると信じ、世界の事象と言語の多様性ゆえに、百科全書的な知もまた暫定的なものでしかありえないと考えていた。そのように、この項目はその冒頭で百科全書の役割を、地上に散在する知識を集成して体系化することと規定していながら、論述の過程で『百科全書』は絶えざる創造の産物へと姿を変えていく。

第八章（「隠喩の体系と政治思想：モンテスキューと『法の精神』における機械的想像力」）はその題名にあるように、モンテスキューの主著における機械に関連する比喩的表現を対象としており、それが政体の構造や機能の記述にいかに関与しているかが分析されている。著者はモンテスキューがホッブズのように国家を一つの肉体として表現することを避けていることを指摘しつつ、各政体の機能が力学的な用語で記述されているさまを示し、モンテスキューにとって国家が静止した構造物ではなくさまざまな力の衝突や均衡によって機能するものであることを明らかにしている。同時にこの機械に関する隠喩はほかの隠喩体系（特に水や河川に関する隠喩）と共存しており、後者は政体の変革など、社会の変化が機械に関する隠喩では記述できない場合に現れることが多いという。このように隠喩は単なる文体上の問題にとどまらず、ある問題設定の特徴やその限界を如実に表している。

最後の第九章は「『法の精神』の意図：論述の文体、論証の詩学、概念の製作」と題され、この作品の思想的意図と論述との関係を考察し、この作品独自の「論証の詩学」とでもいうべきものを明らかにしようとしている。著者はまず『法の精神』における修辞上の手法や統語法の特徴を分析したのち、この大著の中心である「事物の本性に由来する必然的關係」としての「法」の概念を検討し、『法の精神』における複雑な概念体系がこの「事物の本性」の多面性にかかり依存していることを示している。

このように、本書はかなり多様な対象を扱っており、総括的な結論を導き出しているわけではないし、ほかの対象にも適用可能な統一的な方法論を提示しているわけでもない。その点では、18世紀の思想における言語や概念の用法などについてより体系的な研究を期待した読者にとってはやや期待はずれかも知れない。また、本書の文体や論理の運びに戸惑いをおぼえる読者もいるかも知れない。方法上の厳密さを追求する姿勢は理解できるが、精緻な分析が展開される反面、各章の全体がつかみにくいことがあり、その分析の結果、明確な結論が導き出されるとは限らないので不満が残ることもある。特に最終章では、『法の精神』におけるモンテスキューのレトリックの具体的な分析は魅力的だが、予告されている問題（思想とエクリチュール、モンテスキューと読者の関係など）についての考察をもっと掘り下げて展開してほしかったという気がする。

しかし本書は啓蒙思想と言語という問題のいくつかの側面について、重要な示唆を与えてくれる。冒頭に書いたように、ここで問題にされているのは思想それ自体よりもある問題に伴って現れる言説のあり方であり、いくつかの主張や主義に要約されて単純化されてしまいがちな啓蒙思想が、実は形成され表明される過程で適切な言語を求めて無数の試行錯誤を経なければならなかったことがこのようなアプローチによって明らかにされている。前半の四つの章で扱われてい

る諸概念にしても、その重要さや多面性はすでに知られていたが、実際に文献に即してその変遷を精密にたどった点でこの研究は貴重である。しかもそれが用語や概念の分析に終始するのではなく、その概念に固有の問題があり、概念のニュアンスの変化が問題や争点の変化に伴うものであることが論証されていく過程は非常に興味深い。さらに後半でも、デイドロが『百科全書』という自分の大事業の困難さに直面する姿を、デイドロ自身の『百科全書』論をもとに照らし出している点や、最後の二章でモンテスキューがまったく新しい領域を開拓するに当たって自分の言説を練り上げていった過程が分析されている点も刺激的な考察である。本書を構成する論考を通じて著者の追求している問題は、単なる概念史ではなく、概念や言説を創造する行為としての思想のダイナミズムであるともいえる。そしてそれは言説や概念の力とその限界という、18世紀の人々にとっても重大な関心事であった問題を扱うために必要な考察であることも著者が結びで言っているとおりである。

さらに、この一連の論考は、18世紀の思想を研究する方法論の面で貴重な示唆も与えてくれる。近年、この領域では社会史的方法による研究が盛んで、特に出版物や読者を対象としたものが多い。その代表的な例として、ロジェ・シャルチエによる読書行為の社会史的研究やロバート・ダーントンによる『百科全書』の出版と普及の歴史、さらにダニエル・ロシュによる地方都市のアカデミーの社会史的調査などが有名である。このような研究は確かに思想の発信と伝播の実態に迫るという利点があるし、伝統的な思想史や文学史では軽視されがちだった定期刊行物、地下出版物、民衆向けの出版物などの役割を視野に入れることを可能にし、18世紀についての従来の図式的な理解を修正してくれることも多い。そのような点ではダーントンやシャルチエが「下からの視線」あるいは「下からの方法」と形容しているこのような研究も大いに評価できるものであるが、その方法も万能ではない。確かに思想は受容されてはじめてその力を発揮するものであるが、実際には受容のあり方は一様ではなく、それは統計的方法によって特定できるものでもない。たとえば、『百科全書』の販売部数や購読者の統計的調査がいくら精密になっても、本書の第三章の主題である「市民」概念の多面性や、第六章で取り上げられているアダム・スミスによるピン製造法についての記述の利用のような、具体的な受容・影響関係を論じることができないであろう。そのような意味では、本書は伝統的な「概念史」としての思想史がなお有効でありうることをも示してくれる。